Society of Japan Science Teaching

環境教育における参加者層の違いと教育効果の関連性

○津田高明[A]，入江潔[A]，原内裕[A]，神田房行[B]
TSUDA Takaaki, IRIE Kiyoshi, HARAUCHI Yutaka, KANDA Fusayuki
株式会社ドーコン　環境事業本部　環境保全部[A]　北海道教育大学　釧路校[B]

【キーワード】　環境教育，参加者属性，体験型学習，教育効果，グループ間比較

1　はじめに

環境教育で対象とされる参加者は、社会階層や年齢、環境への意識等の点で非常に多様である。しかし、参加者の個人属性の違いによって教育効果がどのように異なるのかを明らかにした事例は少ない。この点を明らかにすることは、参加者層に応じた効果的な教育方法を検討する上で重要であると考えられる。

そこで本研究では、異なる個人属性を持つ参加者に対して同一内容の環境教育を行うことで、個人属性と教育効果の関連性について明らかにすることを目的とした。

2　研究方法

調査では、平成20年7～8月に北海道東部で行われた体験型の環境教育に参加した①地域の大学生(40名)、②地元住民（23名)、③地域の教育機関の教員(18名)の3グループを対象とし、環境教育の事前及び事後にアンケート調査を行った。事前では参加者の個人属性として性別、年齢、職業、出身地、参加動機、環境問題に対する関心(5段階)を、事後では教育効果を把握する項目として、環境問題に関する関心の変化(5段階)、環境教育への再訪意思(4段階)、参加したい教育形式を調査した。

3　研究結果

(1) 各グループの特徴

各グループの主な特徴を表1に示す。カイ2乗検定の結果、性別以外の項目に関してグループ間での有意差が認められた（$p<0.05$)。3グループを比較すると、住民は環境問題への関心が高い一方、学生と教員では年齢以外に大きな違いは見られなかった。

表1　各グループの主な特徴

グループ	学生(n=40)	住民(n=23)	教員(n=18)
年齢	20代(87%)	60代(56%)	30代(89%)
出身	道内(53%)	道内(87%)	道内(56%)
環境問題への関心	関心はあるが、特に何もしていない(65%)	環境に関する活動に参加している(52%)	関心はあるが、特に何もしていない(78%)

(2) 各グループに対する教育効果

各グループに対する教育効果を表2及び図1に示す。環境教育後の意識変化についてカイ2乗検定を行った結果、グループ間に有意差はみられず（$p<0.05$）、どのグループにおいても「上昇した」「大きく上昇した」が90%以上を占めた。一方、再訪意思に関しては有意差がみられ、（$p<0.05$)、住民は他より再訪意思が大きかった。また、教育形式には有意差がみられず、各グループとも体験会形式を希望していた。

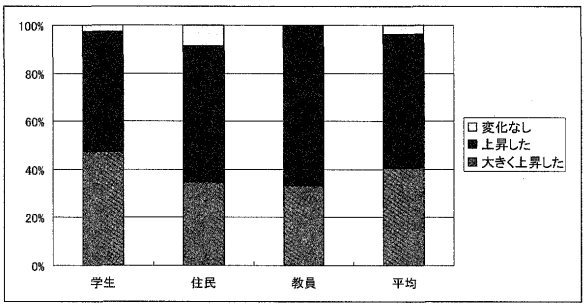

図1　各グループでの意識の変化

表2　再訪意思及び教育形式

グループ	学生(n=40)	住民(n=23)	教員(n=18)
再訪意思	機会あれば参加(73%)	積極的に参加(70%)	機会あれば参加(100%)
教育形式	体験会(82%)	体験会(95%)	体験会(94%)

4　考察

本研究で対象としたグループでは、年齢や環境問題への関心の点において違いがみられたが、事後では全てのグループに同様の意識変化がみられた。各グループとも体験会方式には再度参加したいと回答していることから、体験会方式は知識や経験の違いに影響されずに一定の教育効果を与えられたためと考えられる。

一方、再訪意思に関してはグループ間で異なり、住民のみが積極的に参加する意思を示していた。住民は他グループより環境に関する活動を行っているため、本研究のような環境教育への参加も無理なく参加していると考えられる。このため、環境への活動をあまり行っていない参加者に対しては、環境教育の参加の機会を積極的に与えることが必要と考えられる。

NII-Electronic Library Service